

はじめに

私がまだ若手の救急集中治療医であった頃のICUでの話です。ある重症患者を担当し、日々血液検査やX線写真などの検査結果がよくなるのをみて、私は自信ありげに意気揚々とICUに来ました。しかし、患者の顔を見て衝撃を受けました。前日より明らかに疲れ、やつれ、まるでどんどん重症化しているようでした。自分は一体何をしているのか、間違った治療をしているのだろうか。早期離床やPICSに携わるきっかけとも言える出来事でした。そのときの私は、患者さんの人生・未来に思いをはせることができていなかったように思います。

現在は空前の離床ブームと言っても過言ではないでしょう。各学会が、こぞってこのテーマを取り上げ、さまざまなシンポジウムやパネルディスカッションが組まれているのを皆様も目にしたことがあるのではないのでしょうか。患者、家族、そして社会に大きな損失をもたらすICU退室後症候群（PICS）にスポットライトが当たり、その対策に医学会が一丸となって取り組んでいます。救命ばかりが議論されてきた一昔前と比べると、これは非常によい傾向だと思います。しかし、最近は少し過熱し過ぎて方向性が違うのではと思うことがあります。早期離床というのはただのツールであり過程です。患者が社会に帰るにあたり必須のものではありません。どうしたら上手く離床が達成できるのか、どのような離床のシステムがよいのかといった議論ももちろん大切ですが、そこで議論が終わってしまっていることが近頃は見受けられるようになりました。過程は結果のためにあります。結果とは言うまでもなく患者の社会復帰です。患者が社会へ帰るために本当は何か必要なのかをわれわれは見極めなければなりません。本書では、結果を見据え、その過程をよりよいものにするためにわれわれに何ができるのか、を詰め込んだつもりです。

私にも家族がおり、この本を手にしてくださった皆様にも家族がいらっしゃると思います。大切な人がいざ重症患者としてICUに入ったときに、受けてもらいたいと思えるような医療を日本各地で実現するために本書が少しでもお役に立てば幸いです。

2019年6月

著者を代表して
劉 啓文